



「子どもと遊んで、自分も楽しんで、それを『生業』にしてきた珍しい人種」と私を語るのは長女ミヤコ。

一九五一年に生まれ、一九七三年に日本福祉大学(サークル「児童文化部」所属)を卒業。それからというもの、富山に戻り教員(養護学校)をする傍ら、家庭の一室を開放し「どろんこ文庫」を開設。

一九七七年に数々の恋愛遍歴の末、宮永恵子と結婚。長女が誕生してからは、フォークシンガー・高石ともやの「私の子どもたちへ」に導かれるように、一九八〇年、子どもたちを過疎の山に「放牧」したらどうなるかを試みた。「野草塾」を山岡均晴氏と実践。山岡均晴が事故で死亡。その精神を一九八三年、富山県八尾町の山里で「子どもイタズラ村」を開設。一九八四年、児童精神科医・渡辺久子先生ご家族が参加。

高度経済成長期に突入した時代背景に、子どもの育成環境の劣悪化が進み、「先駆的」活動をマスコミが取り上げ、テレビ出演やコラム執筆や講演も行った。

一九八五年「子どもイタズラ村づくり」(教育史料出版会)の上梓に伴い、活動が全国的に認知される。



イタズラ村

さて、生業とはいえ、一九七三年から

富山県立富山養護学校(現支援学校)、富山市立総曲輪小学校(情緒障害児童級)、東京学芸大学特殊教育研究施設内地留学(県の派遣一年)、八尾町立杉原小学校(特別支援級)を経て、一九八五年に国立富山大学教育学部附属養護学校・文部教官教諭として赴任。県教育委員会の縛りから逃れ、子どもイタズラ村の実践と並行させ、障害児の「遊び」や「表現」をテーマに研究実践を自由自在に行う。一九九五年「わんぱくたちの独立宣言」(国土社)を上梓。一九九七年、生業である附属養護学校者の「子どもも教師も楽しくなる養護学校の授業づくり」(明治図書編集代表)を上梓。そして、二〇〇〇年「明日の遊び考」(久山社)を刊行。子どもイタズラ村の未来像を描きながら、教育現場でのあそびの自由な実践から「応用行動分析」が台頭。養護学校教育現場への意欲が萎える。二〇〇三年退職を決意。



二〇〇四年、娘二人が大学を卒業を契機に、NPO法人「富山・イタズラ村・子ども遊ばせ隊」を創設。事業は二つ。①子どもイタズラ村親子合宿(一泊一人八、〇〇〇円)②遊びのワークショップ(皿回し)「付き子育て支援講演(講演料三万)」。これまでの実績もあり講演依頼が全国から殺到。富山大学非常勤講師(一九九五年から継続)、富山短期大学幼児教育学科非常勤講師、富山国際大学こども育成学科非常勤講師に就任。



順風満帆に見えたが、落とし穴があるものだ。二〇〇八年七月一二日に行った「親子合宿」においてY君(当時一〇歳)が川遊び中に溺死。刑事(略式命令罰金五〇万)・民事(保護者への約五〇〇万)が決着したのは二〇一一年一月。二〇回の事情聴取を受けるも、「鬼刑事」と呼ばれるT刑事が最後の取り調べ後、「息子をいつか合宿に行かせたい!再起を願う」と、その一言に涙。NPO会員は減ることなく私を支えた。富山県南砺市に住む会員酒井久美子さんは自宅を開放し「イタズラズ」と名付け、近所の家族とこどもを巻き込んで「遊び場」を作った。失意の私をなんとかしたいという久美子さんの思いだった。



所属することも環境学会は、二〇〇九年、「子どもの自由な遊びと安全・安心の環境形成のためのガイドライン」作成委員に私を参画させた。学会メンバーが福井大学で「遊びのリスクマネージメント」をテーマに講義の依頼。星槎国際学園星槎高校富山学習センターから非常勤講師の依頼。落ちこんで塞ぎこんでいる時間がなかった。

二〇一一年、東日本大震災。渡辺久子氏から「皿を一〇〇枚もって郡山に行こう!」との突然の提案に「震災後郡山こどもの心のケアプロジェクト」(代表菊地信太郎)に参画。生きる意味を失いかけて自死を考えていた者にとって、このプロジェクトに参加できたことは幸いだった。その後、こども環境学会の東北プロジェクトに参画し、NPOの再生の道を探ることになる。



二〇一七年一月三日、妻であり相棒だった恵子が非結核性抗酸菌症のため大量咯血。入院を繰り返す。

六月「第二八回日本小児科医会総会フォーラムIN富山」での講演。国際会議場での皿回しワークショップは大反響。二〇一二年には北海道で日本小児科医会と北海道教育庁の共催で北海道胆振教育局「アウトメディア・フォーラム」を実施。企画段階から早川も参画。六〇〇人の参加で成功。

その後、函館市小児科医会、宮崎県小児科医の研修会で講演を二〇二〇年五月に予定。二〇二〇年三月一七日、妻恵子が逝く。一五年活動したNPOを閉じる。

コロナの風が吹き荒む中、自ら企画した富山で「早川たかしの遊びのワークショップの可能性を探る」(後援日本小児科医会、日本小児科学会、こども環境学会他)は、コロナで中止。宮崎講演も中止。失意の底にいた。



二〇二〇年八月、再び「光明」が見え始める。星槎高校の教え子・H君が日本福祉大学を卒業後、コロナで就活ができていない。その相談が縁で、早川の相棒になる!ことを買ってできた(二〇二〇年二月)。H君は八月から本格的に仕事を手伝う。諦めていた福井大学での「こども環境学入門」をオンライン(ワークショップなし)で成功させた。

八月に浜松市から講演依頼。一月に中止になった宮崎から再度(二〇二一年)の講演依頼。どの依頼も日本小児科医会の関連のもの。

一月には学習塾を経営する鳥居平和氏と出会い、二〇二二年三月には、遊びと学びは融合してこそこどもの育成ができる!との理念を実現するための実践・研究を行う組織作りが始まった。

早川たかし、七〇歳(三月一六日誕生日)。年が明け、日本福祉大学教授・牧真吉氏(精神保健Ⅱ)からも講義の依頼。新しいうねりが起こりつつある。

二〇二二年、現在、六月。



指ハブ